

平成22年度 スーパーバイザー事業研究発表

研究テーマ「確かに学び、よりよく生きる子どもを育てよう」

～学びあい、かかわり合う子ども～（特別支援・学級経営）

鳥取市立散岐小学校

## 1 はじめに

本校は、鳥取県東部、鳥取市河原町（旧八頭郡河原町）に位置し、近くには千代川が流れ田畑・果樹園が点在する自然豊かな環境に位置する。児童数81名、家庭数60の小規模校である。家庭の多くは共働きだが、祖父母の子育て協力や地域の方のかかわり等もあり、地域で子どもたちを育てる土壌があるといえる。今年度10周年を迎えた「地域の<sup>みんな</sup>がっこうづくりの会」では、川遊び、笹巻き作りなどいろいろな企画で、地域の方とかかわりをもっている。また、保護者は学校教育活動に積極的に参加し、協力的である。

本校児童は、素朴で素直、物事にまじめに取り組むというよさを持っているが、人や物事に積極的にかかわる力や自己表現力、学習意欲の継続といった点で課題をかかえている児童がいる。また、一人親家庭の割合が15%あり、愛情不足の児童、家庭の様々な問題の影響を受け母子関係が不安定な児童、基本的な生活習慣や学習習慣が定着せず情緒不安定で低学力となっている児童もいる。

河原中学校区には、3保育所と1幼稚園、散岐・西郷・河原第一の3小学校があり、全体的に児童・生徒数が徐々に減ってきている。これまで中学校区では、交流会、体験入学、水泳・陸上記録会、進入学における担当者の連絡会等、連携を図ってきた。また、中学校区トリニティープランでは、生活や学習の共通テーマを決め、保・幼・小・中・家庭・地域でめざす連携指導を実施している。今後の課題として、このような地域の一貫教育の取り組みが継続できる組織作りをしていくことが挙げられる。



【校舎全景】



【愛校活動（ウサギの世話）】



【PTA 愛校作業の様子】



【<sup>みんな</sup>がっこうの楽校づくりの会 笹巻き作りの様子】

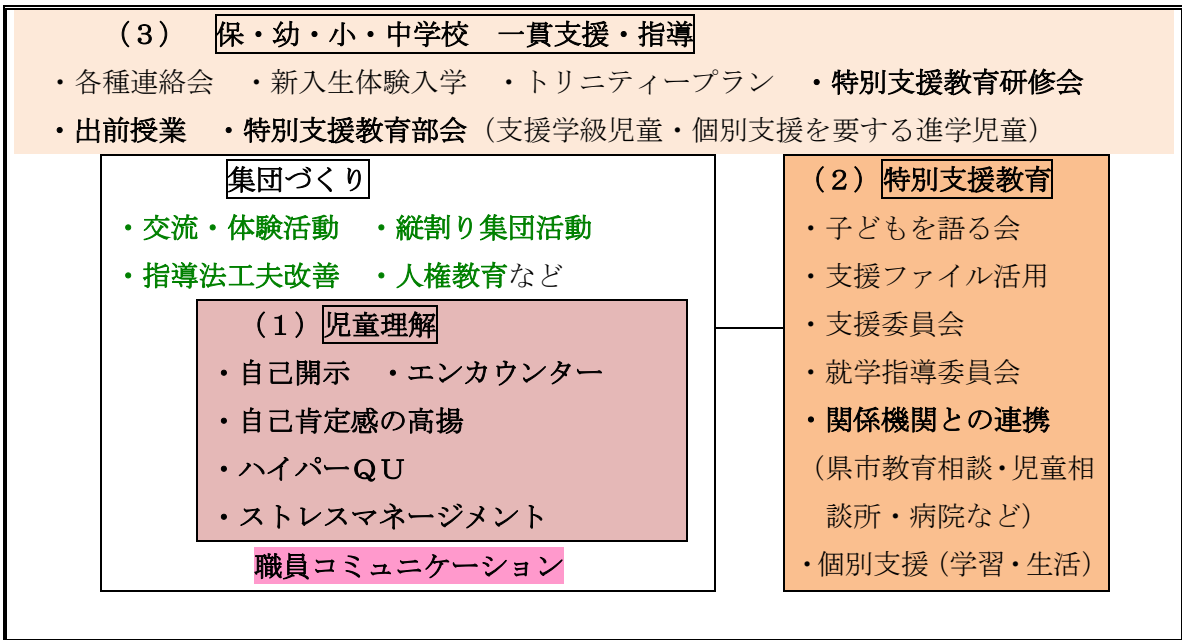
## 2 研究のねらい

前述の本校の児童や地域、中学校区の実態をふまえ、本校児童には、人や物事にかかわりながら自らの生き方や自立について学びあうことが大切であると考えた。人や物事から学びあいかかわり合うよさや生き方を確かに学ぶこと（自己肯定感の向上・自己表現力）、そのために自己実現（自立）の力をつけよりよく生きることを目指し、「確かに学び、よりよく生きる子どもを育てよう」を研究テーマとして設定した。

**研究テーマ** 「確かに学び、よりよく生きる子どもを育てよう」

### **研究の視点**

- (1) **すべての子どもの受容から出発した集団づくり（学級経営・学校教育活動）**  
★児童理解をもとに個を育て、全体への結合を図る。
- (2) **一人ひとりのニーズに合わせた学習・生活支援（特別支援教育の充実）**  
★人とのかかわりや関係機関との連携を大切に生活・学習支援
- (3) **特別支援教育における保・幼・小・中学校の連携（組織作り、発展）**  
★情報を共有化し、一貫した個別の指導・支援を図る。



### 3 研究の内容

(1) **すべての子どもの受容から出発した集団づくり (学級経営・学校教育活動)**

○児童理解を出発点とした学級経営。

- ・教師の自己開示
- ・児童理解
- ・自己肯定感の高揚 (自分の居場所)
- ・ストレスマネジメント活用
- ・グループエンカウターの実践 (6年生・保護者と参観日で)
- ・ハイパーQ Uの分析 (研修会 8/5 県教育センター 浅田 倫也先生)

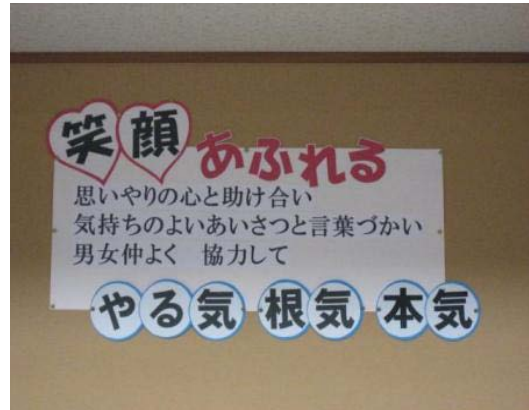
○確かに学ぶ…人や物事から学びあいかわり合うよさや生き方を確かに学ぶ。

- ・交流・体験活動
- ・縦割り集団活動
- ・きょうだい学年活動
- ・指導法工夫改善
- ・人権教育 (人間関係づくりスキル・かわり方・トラブル解決策) など

☆職員間コミュニケーションをかかさない。  
(気づき、指導したことを率直に伝える。その場でその教師が指導する。)



【きょうだい学年野菜作り】



【学級集団づくり】



【研究授業・指導法工夫改善】

～人・もの・ことにかかわる力を育成～

- ・ 1人1研究授業

(全教諭・養護教諭・講師)



【縦割り班そうじ】

4色グループ（8班編成）

**(2) 一人ひとりのニーズに合わせた学習・生活支援**

- 子どもを語る会、職員間コミュニケーション、校内支援委員会の充実
- 福祉・医療・教育機関との連携・ネットワークづくり（連絡一覧表）
  - ・ 県市教育相談 ・ 児童相談所 ・ LD等専門員 ・ SC ・ 医療Dr
- 学習支援の充実…基礎学力の定着、学習支援体制の充実（TT・少人数・個別）
  - 個別学習（長期休業中・課外）
- 生活支援の充実…基本的な生活習慣の定着（散岐っ子の1日調べ）
  - （支援学級児童や要支援の児童の配慮を基本にして考える）



【パワーアップタイム】昼掃除後 5分間 ドリル形式



【TT体制・少人数など】



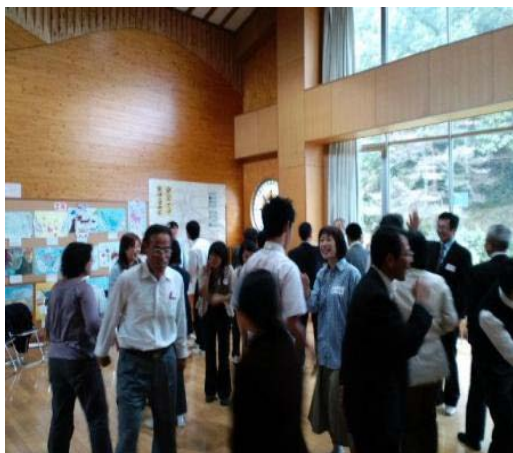
【かかわりあう】  
(学習形態のめりはり)



【個別学習指導】  
(課外 オープンエンド)

**(3) 特別支援教育における保・幼・小・中学校の連携、組織作り**

- 中学校区特別支援教育研修会の開催…中学校区の教職員がつながり、長い目で見守り育てる一貫教育
- 中学校区特別支援教育部の充実…情報の共有、指導の一貫性を図る取り組み
  - ・ 特別支援学級児童について情報交換
  - ・ 要支援の進学児童
- 出前授業の予定 (2月 中学校から小学校へ)
- これまでの連絡会や交流会
  - ・ 新入生体験入学
  - ・ 連絡会 (保幼小) (小中)
  - ・ 運動記録会 (上学年)
  - ・ 交流 (4年 鮎太鼓)
  - ・ 中学校区教職員研修会 (職員)



【中学校区の教職員同士の関係づくり】



【グループエンカウンターの実践】

#### 4 スーパーバイザーの役割（I P U環太平洋大学 教授 住本克彦先生）

##### ① 平成22年7月1日（木） 校内職員研修会（兼 特別支援委員会）

- 内容
- A「児童とのかかわりを大切にした学級経営」
  - B「発達障がいのある児童への支援（反応性愛着障害 他）」
  - C「保・幼・小・中学校の連携」



【職員研修会の様子】

##### A「児童とのかかわりを大切にした学級経営」

家庭の様々な問題の影響を受け、基本的な生活習慣や学習習慣が定着せず情緒不安定になっている児童がいる本校の実態をふまえ、児童理解を大切にした教師と児童とのかかわり方、児童同士の学び合いやかかわり合いを生かした学級づくり、集団づくりについて、事例を挙げながら指導・助言していただいた。

##### （かかわり方 基本3ポイント）

- ・ 子どもと1対1で正面から向き合う。担任の自己開示から
- ・ タイミングを外さない、遅らせない、あきらめない。
- ・ 自分の方法でかかわるものをもつ。  
例：ノート指導の中のコメント、共通の興味関心…

##### （いろいろなかかわりをもつ中でしていくこと）

- ・ ストライクゾーンを広く構える。（型にはめない柔軟な対応）
- ・ 心の問題の対処手順  
リレーションの形成 → 問題の整理と共有 → 応用、折り合いをつける  
（関係、つながり）

### (教師が心がけたい児童とのかかわり方)

- ・ 基本は「ほめる」・視線をあわせる ・笑顔で接する ・スキンシップを図る
- ・ 抱きしめる ・明るく静かな語りかけ ・深呼吸で落ち着け
- ・ 危険を描写し、簡潔に論ず ・「ありがとう」の多用
- ・ ストレスマネージメント

## B「発達障がいの児童への支援（反応性愛着障がい）」

在籍児童の発達障がいについても、専門的な知識について理解を深め、今後のよりよい対応や支援の在り方、保護者対応について助言していただいた。

### (反応性愛着障がいについて)

もともと、愛着障がいは、手酷い児童虐待、遺棄などで実親から養育を拒否され実親との間で「愛着」を形成できなかった子どもが、里親、養護施設職員など愛着形成者による育て直しの過程で、顕在化し愛着形成者を困惑・混乱させることで注目されるようになった、「人間関係の障がい」という。それが現在、施設の児童でも里子に出された児童でもなく、一見して普通の家庭の児童にも現れてきている。

今、非行少年・ADHD・アスペルガーの可能性が推測されている児童生徒のかなりの部分がこの愛着障がいまたは愛着障がいとの複合障がいではないかと思われる。

親の多くは、「自己責任」「あまえるな」等のかけ声の下に、正反対の育て方へ動いているように思われる。

非行への一里塚ともいわれている発達障がいである。

### (今後の対応や支援について)

- ① 本人が安心感を実感できる場をつくる。(学級・学校環境・人間関係)
- ② 心理教育。自尊感情の育成。よいところ見つけ。
- ③ 生活と学習の支援(今後の自己実現に向けて力をつけていく)
- ④ 愛着形成の援助。(日常の家庭的な対応。かかわり、会話、朝食…)
- ⑤ 心理治療。医療機関や専門機関(病院と児童相談所)と定期的に連絡を取り、実態に合わせた具体的な対応をしていく。

※ 中学校への橋渡しが重要である。(具体的な支援方法を検討)

- ⑥ 子育てにおける保護者の孤立化を防ぐためには、「ねぎらい」が大切。そして保護者とのリレーションの形成へ。

**リレーションの形成 → 問題の整理と共有 → 手だて・応用**

## C「保・幼・小・中学校の連携」

- ・ 情報発信・情報の共有化の場を確保
- ・ 授業交流（出前授業）
- ・ コミュニケーション能力の育成
- ・ 児童・生徒の交流の場を設定
- ・ 個別の指導記録の継承や引き継ぎ

### ② 平成22年10月8日（金） 中学校区特別支援教育研修会

（テーマ） 「カウンセリング技法を生かした学級づくり」

「保・幼・小・中学校の連携を図り、河原中学校区の地域全体で子どもを育てる」ことを目指して、中学校区の保・幼・小・中学校の職員を対象にした特別支援教育研修会を開催した。住本先生には、講義とワークショップ形式でいろいろな人間関係づくりエクササイズを紹介していただいた。実際にエクササイズを体験することで、自己開示の大切さ、相手の心や気持ちに寄り添うことの大切さなどを実感できた。

（視点）・子どもたちとの人間関係づくりのために、大切にしたいことをつかむ。

- ・ 中学校区職員同士のかかわりをもつ。
- ・ グループエンカウンターの実践と方法を理解する。



【講 義】

グループエンカウンターのポイントをわかりやすくまとめて話をされ、理解が深まりました。問題行動の予防という観点で生かすことができると思いました。

講義だけでなく、ワークショップがあり大変良かったです。一つ一つのエクササイズのねらいやポイントをわかりやすく説明していただき、学級でも使ってみようと思いました。





エクササイズをしていくと、一緒に活動したグループの方に対して親近感がわくことが実感できました。「自己開示」まだまだ苦手ですが、自分が心を開かないと相手も開かないと思いました。

【エクササイズ体験】

## 5 研究のまとめ

### 成果

- (1) 児童理解をもとに児童のニーズに合った支援を図るために、職員同士のコミュニケーションが活発になり、情報の共有と一貫した指導・支援ができつつある。
  - ・自己開示からつながりを持つ職員 ・支援委員会 ・個別支援（学習と生活）
  - ・教師が心がけたい10の約束（住本先生より）
  - ・多様な人間関係づくりスキル（エンカウンター・ストレスマネジメントなど）
  - ・一人ひとりの居場所がある学級づくり（学習や生活）
- (2) 型にはめない柔軟な対応をする大切さを学んだ。
  - ・関係機関と連携を図り、発達障害や問題行動への対応（担当者だけでなく、職員研修や終会で共通理解を図った。）
- (3) 子育てにおける保護者の孤立化や教師の困り感への対応として、相談機関のネットワークづくりを築き、活用した。
  - ・特別支援教育ネットワーク一覧表の作成（いつでも誰でも連絡ができる）
  - ・教育相談（県・市教育センター・LD等専門員・SC）
  - ・生活支援相談（児童相談所）
  - ・医療相談（支援学級児童の薬の服用、今後の支援の方向性）
- (4) 学びあい、かかわり合うよさのを実感できる教育活動を目指し、今までの取り組みを見直してきた。校内・校外行事、普段の学習において「人・もの・こと」へかかわらせ、かかわるよさを実感させたり、学び方を習得させたりして学習・生活意欲及び自己肯定感を高めようと進めてきた。どの児童も学校が大好きで、不登校やその傾向にある児童もいない。

- (5) 児童一人一人に対して様々な対応をしてきたことに加え、「基本はほめる」を原則に「賞賛の場の設定」をしかけていった。その成果として、情緒が不安定だった児童も少しずつ笑顔が見られ精神的な安定を生み出すことができた。明るい子どもらしい笑顔が一番の成果であった。

## 課題

- (6) 住本先生を講師として開催した「河原中学校区特別支援教育研修会」によって、保・幼・小・中の連携を図る教育支援体制づくりの方向性が見えてきたが、地域全体で子どもたちを育てることを目指した中学校区のトリニティープランとの連携を図っていきたい。
- (7) 「保・幼・小・中の連携」を図るための連絡会、支援委員会等の位置づけを明確にしたり、保育や授業の交流、児童生徒間の交流を計画的に進めたりして、情報を共有しながら「地域で一貫して育てる中学校区」を目指していきたい。

## 6 おわりに

スーパーバイザー住本先生の指導・助言を生かし、今年度までに取り組んできた活動の一つ一つを研究の3視点で意味づけや関連づけを行い、「確かに学び、よりよく生きる子ども」の育成に向けて研究を進めてきた。その過程で住本先生には、保・幼・小・中学校及び教育・福祉・医療機関との連携の大切さ、組織作りとその活用の在り方について多くのご示唆をいただき、研究を深めることができた。住本先生に厚く感謝申し上げたい。

今後は、この研究成果を生かした児童理解、集団づくり、個別支援にあたりたい。また、中学校区の児童生徒の情報共有化をもとにした連携の在り方を工夫改善し、「地域で一貫した考えのもとで子どもたちを育てる」中学校区をめざしていきたいと思う。